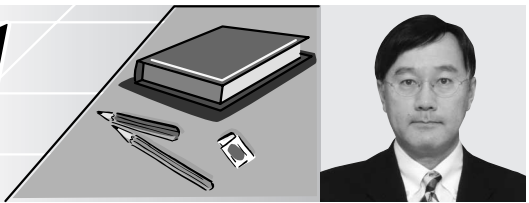


学生時代と図書館 71

— あこがれの場所 —

坂本 季詩雄



図書館に足繁く通うようになったのは大学生になってからだ。わたしの母校同志社大学の図書館にはラウンジがあった。そこは図書館の中では幾分変わった空間であった。談笑しても良かったので、友達との待ち合わせによく使っていたのだ。そこに行けば、誰か知り合いがいた。だから大学での一日は、図書館から始まると言っても良かった。

また、図書館でのアルバイトで、書籍の引越しをしたこともあった。分類ごとに指定された書棚に書籍を整理しながら並べた。京都の蒸し暑い夏の一週間を、書庫の階段を噴き出す汗を拭きながら、本を抱えて上がったりがったりしながら過ごした。それが縁で、図書館司書の方々と話をすることがあった。海外の大学の図書館の所蔵書籍数は同志社大学とは比べものにならないくらい多いと聞いた。どんなところなのだろうと想像した。同志社大学の図書館でさえ書庫はいくつもあり、どれもそれなりに巨大だった。特に読書家ではなかった私は、その書籍の多さに圧倒されっぱなしだったからだ。しかも、そんな私が手に取る書籍の大半には、すでに誰かが読んだ痕跡が残されていた。

その後、図書館は次第に私のあこがれの場所に変わっていった。以来、いくつもの都市、国の図書館を訪れてきた。慶応大学三田学舎の旧図書館、ニューヨークのパブリック・ライブラリー、すでに図書館の機能を果たしていないが、アイルランド、ダブリン大学のトリニティー・コレッジ旧図書館、ロンドンの大英博物館にある旧リーディング・ルーム。昨年はイギリス・セミナーで滞在したキール大学の図書館へも通った。

どの図書館もそれぞれの雰囲気を持つ魅力的な建物だが、扉を開けて入ってみると共通する独特の気が流れている。静かだが、静寂ではない、ざわめく波長だ。未知の知識を得ようとする多くの人の熱気なのだ。今そこにいる人たちだけ

でなく、これまで図書館を訪れた人々の気が充満しているように思える。また、書棚にある書籍の背のタイトルを覗きながら幾竿もの書棚の間へと歩を進めると、無数の著者の呼びかけを感じる。ふと一冊の書籍を取ってみては、パラパラとページを繰り、元の場所へと戻す。扉を押し開けて図書館に入ると、自分もそのような人々と同じように未知の文化へと旅立てるように思うのだ。

現在、書籍は大量に同一のものが印刷される。ヨーロッパでは、ヨハネス・グーテンベルクが15世紀半ばに活版印刷術を開発して以来、書籍を多くの人が手にすることができるようになったのだ。それまでは、読み書きのできる一部の人が、写本していたので、さまざまなスペリングが存在し、文字にも書き手の個性が表れた。読書も当時は数少ない書籍を音読し、多くの人がそれを聴くことが当たり前だった。グーテンベルク以降、書籍は全く同じスペリング、文字を持つようになり、この点では個性の入り込む余地はなくなった。書籍を一人一人が手にできるようになり、黙読することが普通になった。だから図書館は静かな場所と考えられている。

しかし、図書館の中には、便利な電子書籍では味わうことが不可能な文化のざわめきがあるのだ。グーテンベルク以前も以降も、様々な言語、スタイル、文字で物語られる無数の文化のざわめきに出会える場所なのだ。誰かが書籍に残した痕跡は、道標となり思いがけない場所へと導いてくれる。見ず知らずのもの同士が書籍を通じてつながりを持てる場所だ。大学時代は何となく利用してきた図書館だが、今では図書館は私のあこがれの場所の一つだ。家が書籍でパンクし始めたからでもあるのだが、いつか、図書館の隣に住みたいと思っている。

さかもと きしお(教授・アメリカ現代詩・映画学)